目次

（１） 1
（２） 1
（３） 2
（４） 3
（５） 4
（６） 5
（７） 6
（８） 6
（９） 7
（１０） 8
（１１） 9
（１２） 10

奥付
奥付 12

（１）

どうしたもんか、と俺はため息をついた。先輩に借りた本、読むには読んだ。が.....正直、微妙なのだ。いや、微妙というのは生ぬるい。良さがまったく分からない。でも感想を求められて、そんなことを言ってよいものだろうか？ 否。よいわけがない。ではどうするか。俺はもう一度本を開いた。最初はよかったのだ、最初は。久しぶりに会った同級生が変貌をとげていたら俺だって声をかけるし、食事でもどう、と誘う。好きだった女の子ならなおさらだ。昔はぱっとしなかった俺だって（今でもぱっとしないけどそこはスルーで)、今ならアピールできるかも、って思うのだ。恋の始まりの雰囲気に満ちていて、序盤はとてもいい。いいのだが.....。読んでいくうち、ん？ と思うことがちらほら出てきた。それとともに違和感も増していき、結末に至ってはもう、なんじゃこりゃとしか言いようがなく、読み終えて頭を抱えた。こんな話のどこがいいのだろう。
こんな救いのない話、先輩は本当にいいと思ったのだろうか？ ギャグじゃなく？ ドッキリでもなく？ 真面目に、真剣に、この話が気に入って、それで俺に読ませたかったのだろうか？ たしかにこの本は売れている。ずいぶん前から地元の書店で平積みになっていた。時が経つにつれ広告のポップも派手になり、文芸コーナーからいちばん目立つ場所へ移った。でも表紙が何というか、男が手に取るにはかわいすぎる。だから読んだことがなかったのだけれど.....読まなかった理由は、それだけではないのかもしれない。本に言及しなければよかったのか。先輩が一人で本を読んでいたから、願ってもないチャンスと声をかけた。他大学からうちのドクターにきた先輩と、少しでも仲よくなりたかった。下心がなかったとは言わない。先輩は美人でかわいくて頭がよくて、研究室始まって以来の才媛と、入る前からみなが噂していた。入ってきたら噂どおり、いや噂以上の美人で、俺を含め男はみな舞い上がった。教授連中だって例外じゃない。何かと口実をつくっては、先輩と二人きりになろうとする。下心に気づいているのかいないのか、先輩はいつも笑顔で、快くみんなに付き合っていた。

（２）

一度だけ、非常勤講師と険悪になりかけたことがあった。先輩は感情のない、冷たい表情を浮かべていて、それに気圧されたように、講師がＡ四サイズの封筒を先輩に渡した。いや、きっと返したのだ。先輩の大事なものを奪おうとして、咎められたに違いない。そ

の事件のあと講師は辞めたが、なり手はいくらでもいるし、そもそも空気を読まないことで有名だったから、誰からも慰留されなかったのだろう。俺だって、講師の名前さえ憶えていない。
あのとき声をかけていれば、今頃は先輩と楽しいキャンパスライフを送っていたのではないか。常に一歩出遅れる自分に腹が立って仕方ない。振り返れば、俺はいつもそうだった。
大学院も、気付いたら受験申込期限を過ぎていて、卒論の指導教授に泣きついて入れてもらった。今年で修士も三年目なのに、いまだに修士論文のテーマが決まらない。それというのも、二年間指導してくれた教授が隠遁生活に入ったからで、そのことを教授がいなくなってから知らされた。年末にインフルエンザで寝込み、年明けに研究室へ来たら忘年会の話題で盛り上がっていて、そんなものがあると知らなかった俺は凹んだ。そこへ事務の人が来て、みんな知ってると思うけど、と切り出したのが教授の隠遁だった。驚く俺にみな呆れた顔で、忘年会で言ってたよ、聞いてなかったの、と辛辣なひと言。三ヶ月ほど立ち直れなかった。四月に先輩がやってきて、だいぶマシになった。そのお礼も兼ね、先輩をお茶に誘おうとしているのだが、ゴールデンウィークも終わり、そろそろ梅雨入りしようかという今になってもまだ誘えていない。一大決心で研究室まで来ても、毎回別の誰かが先輩を連れていってしまう、そんなことの繰り返しだった。でも五日前は違った。研究室に行くと、先輩が一人で本を読んでいたから、思い切って声をかけることにした。でも、お茶でもいかがですか、なんていきなり言ったら引かれてしまう。ここはひとつ、本を話題に出そう。気付かれないよう、静かに深呼吸をして俺は言った。
「先輩、本なんて読むんですね」つとめて冷静に言ったつもりだった。声も裏返っていない。よし、第一関門クリア、と思ったとき、本を置いた先輩が顔を上げ、少し頬をふくらませて言った（その顔は超絶にかわいかった）。「本くらい読むわよ。じゃなきゃ博士課程なんて入れないじゃない、失礼しちゃう」「すみません。俺の言う本は、あ.....」
先輩は大きな目をさらに大きく開いて、首を左に傾けた。ゆるいパーマのかかった髪がふわりと揺れて、とてもいい匂いがした（この傾けるしぐさも超絶にかわいかった）。俺は咳払いをして言った。

（３）

「僕の言う本は、小説のことです。僕にとって本は、イコール小説なんで」「俺、でいいのに」「え？」「なんで言いなおすの？ 俺のほうがいいな」「そう、ですか？」「そうよ。だって」「だって？」
「ボクだなんて、まるで女の子みたいじゃない」
言いながら先輩は身体をかがめ、下から俺を覗きこむようにした。目が合って視線をそらしたら、ブラウスから鎖骨が見え、さらにはその下も.....。

「ちょっと」
先輩は怒ったように言った。まずい。なんと言えばいいかわからない。謝るのも変だし、いや謝るべきだろうか。でも謝ったら、故意だと認めたことにならないか？ 故意じゃなく偶然だ。これは事故なのだ。
「見たでしょ」
「えっ、何のことですか」
まずい、声が裏返っている。
「見たよね？」
先輩がぐっと顔を近づけてきた。あふれる目力につい視線をそらしたくなる。でも必死で耐えた。ここで視線をそらしたら、また鎖骨と、その下へ目をやってしまう。
どのくらいそうしていただろう。先輩はふっと軽く息を吐き、まあいいわ、とつぶやいた。
「勘弁してあげる」
そう言って先輩は笑顔になった。ほっとため息をつき、別に俺、見てないっす、と言ってみたが、自分でも驚くほどしらじらしい。というか自白したも同然で、俺が先輩なら、このひと言で有罪と結論付ける。でも先輩はそんなことはせず、さらりと話題を変えた。どれほど有難かったことか！ 一生恩に着るレベルと言っても過言ではない。
先輩はカバンから本を取り出し、その表紙を俺に見せた。「これ、読んだことある？」未読なので首を横に振る。先輩はちょっと残念そうな顔をした。「いろんな男の人に聞いたけど、みんな読んでないのよね」い、いろんな男の人.....？「絶対面白いと思うんだけどなあ」いろんな男の人.....。頭の中に、同じ研究室の男たちが浮かんでは消える。あいつもあいつも、それからあいつも、みんな先輩に声をかけていた。隣の研究室からも、本を借りたいとか何とか言って、三人くらい出入りしていた。あいつらがみんな、先輩のこの本を読んだというのか？ 何とうらやま、じゃなかった、いまいましい奴らだ！「ねえ、読んでみない？」

（４）

いきなり肩をたたかれ、声をあげて飛びのいた。先輩は大きな目で何度かまばたきをして、それからぷっと噴き出した。いやだ、何、食べちゃおうっていうんじゃないんだから、そんなことを言いながら、先輩はまた笑った。その様子が超絶にかわいくて、息がとまりそうになる。先輩は俺に本を差し出した。「これね、女子が男子に読んでほしい小説なんだって。私は、上野くんに読んでほしいな」「ぼ、僕、じゃなかった、俺に.....？」「そうよ。感想聞かせてくれない？ 来週のこの時間。それ以外の日は、予定が入ってて無理なの。だから、ね」先輩は先ほどと同じように首を左に傾け、お願い、と両手を顔の前で合わせると、あろうことか右目でウインクした。この俺に.....彼女いない歴イ

コール年齢の俺にである。俺はすっかり舞い上がり、両手で本を受け取ると、来週のこの時間ですね、必ず読みます、と宣言してしまったのだ。「はああ.....」俺はまたため息をつき、二日後に訪れるであろう修羅場――この言い方が適切かどうか分からないが――を思い浮かべ、失意のうちに眠りについたのだった。
「で、俺にどうしてほしいわけ」翌日、仕事帰りの里中を近くのカフェに呼び出すと、明らかに不機嫌そうな顔でやってきた。そして聞いているんだかいないんだか分からない態度のまま、俺が話を終えたとたん不機嫌そうにそう言った。高校からの付き合いとはいえ、俺を見下す態度にはいつもイライラする。なぜそんな言い方しかできないのだ！でもアドバイスをもらうため、俺はぐっとこらえて言った。「先輩に嫌われないように、なおかつ面白くなかったことが伝わる言い方を教えてほしい」頼りは里中だけだ、お前ほどモテてたやつはいなかった、女性の気持ちを傷つけない言い方を教えてくれ。そう言って、俺は深く頭を下げた。「おいおい、やめてくれよ」その声は真剣に戸惑っているようで、顔を上げると、なんで俺なんだよ、と里中は言った。「だってお前、美晴ちゃんと結婚するんだろ」「はあ？」

（５）

大声を出したせいか里中は気まずそうな顔で、知らないのかよ、と俺に言った。「知らないのかって、何を」本当に分からなかった。里中は何を言っているのだろう。「俺たち別れたんだ」「はああ？」
今度は俺が大声を上げた。続けざまの大声に、周りの客がこちらを見ている。しまったと思ったがもう遅い。ウエイターがやってきて、申し訳ありませんがお静かに願えますかと言った。「「はい、すみません」」二人して小さくなって、声も小さくして俺は言った。「なんでだよ。プロポーズするって言ってただろ」「だから断られたんだよ」「はあ――」里中があわてて俺の口をふさぐ。もがもごと苦しんだあと、ようやく里中が手を離したので、思いっきり深呼吸をした。
「美晴が製薬会社に入ったのは知ってるだろ」里中の言葉に俺はうなずき、コップの水を飲んだ。「入社式のあと病院回りにつれてかれて、そこで会った医者にときめいたんだとさ」「医者に横取りされたってこと？」「言い方は悪いがまあそういうことだ」そうだったのか.....。「だからさ、俺には何もアドバイスできないんだよ。悪いな」もうふっ切れたと言うように、里中はさめきったブラックコーヒーを飲み干した。俺は自分が頼んだカフェオレのラテアートを眺め、美晴ちゃんのことを考えた。
かわいくてしっかり者で、野球部にたとえたら気の利くマネージャーみたいな美晴ちゃんは、同じく野球部にたとえたらピッチャーで四番、キャプテンの里中とお似合いだったのに、人間分からないもんだな.....。そう思った次の瞬間、ラテアートがウサギだ

と気づき、先輩もこのウサギを気に入ってくれるだろうか、などと能天気なことを考えた。それが伝わったのか、里中はまた不機嫌になり、そんなんでいいのかよ、と言った。「へ？」「M三であとがないっていうのに、女の尻追っかけてる場合じゃないだろ。どうすんだよ、修論」「ああ.....」「ああじゃねえだろ。マジでお前、危機感持てよ」何と言っていいか分からず、俺は頭をかいた。そんなしぐさも癪にさわったのかもしれない。里中はわざと大きくため息をつき、お前はいいよな、と言った。

（６）

内心カチンときたが、こういうときの里中は説教モードに入っているので逆らわないほうがいい。はい、はい、お説ごもっとも、と聞いておけば機嫌がよくなる。だからどんな罵詈雑言にも俺は耐えた。耐えて耐えて耐え続ければ、いつか雷雨もやみ、晴れた青空が広がる、そう信じて――。だが里中の説教は一向におさまらない。ナンバーワンとかオンリーワンとか、お題目のように唱えている。俺の修論とどう関係あるのかさっぱり分からないが、過去の経験から、はい、はい、とおとなしく聞いておくにかぎる。だが、かえって火に油をそそぐことになったのか、里中はますますヒートアップしていった。ついには勢いよく立ち上がり、聞いてんのかよ、お前に言ってんだよ、と怒鳴って右手を上げ、振り下ろすしぐさをした。
来るべき打撃に耐えようと、俺はとっさに背中を向けて頭を抱えた。だが痛みはやってこない。そのうち、かすかにすすり泣く声が聞こえた。この声はいったいどこから.....？疑問に思い、おそるおそる顔を上げると――。
里中が泣いていた。右手を上げたまま立ちつくし、顔をぐしゃぐしゃにしている。涙だけではなく鼻水も垂れているが、気にする様子はない。気にするどころの話ではないのだろう。人目もかまわず泣きじゃくり、オンリーワンとか言われても分かんねえよ、俺のどこがいけないんだよ、教えてくれよ美晴、と繰り返していた。吹っ切れたような顔をして、実は相当無理していたのだ。
あまりの衝撃に何も言えなかった。美晴ちゃんとは高校からの付き合いで、何度か破局の危機はあったもののその都度乗り越えたと聞いている。その安心感が、慢心を生んだのか。失って初めて大切さが分かると言うが、里中にとって、美晴ちゃんはそういう女性だったのかもしれない。ふと周囲の視線に気づき、俺は二人分の会計を済ませると、里中を連れてカフェを出た。駅までの道中、背中をさすりながら、元気出せよ、と何度も声をかけた。そのたびに里中は、うん、と言ってはまた泣いた。

（７）

一人暮らしのアパートに戻ると、どっと疲れが出て動けなくなった。里中を寮まで送っていき、それから電車で帰ったので、ずいぶん遠回りをしたことになる。でもなぜだか、気分はすっきり爽快だった。里中も悩み苦しんでいる。それが分かっただけでも収穫だ。有名大学から大学院に進み、修士課程を優秀な成績で修了、将来有望な研究者として順風満帆のスタートを切ったように思っていたが、実情は違うのかもしれない。そういえばいつだったか電話で話したとき、成果を出さないとクビだから、と言っていた。プレッシャーは相当なものだっただろう。美晴ちゃんとデートする回数も減っていたかもしれない。三月にばったり会ったとき、美晴ちゃんがこぼしていたのを思い出す。仕事が忙しくて会えないって言われちゃった、と言う美晴ちゃんは、さびしそうな顔をしていた。そのときは、まだ三月なのに大変だなとか、さすが優秀なやつは違うなとか、そんな風にしか思わなかったのだけれど.....。ふわあ、と大きなあくびが出た。時計を見ると十二時を回っている。明日は十時に研究室へ行かなくてはならない。先輩に何と伝えるか、まだ決めていないけれど、俺と先輩の間には、まだ何も始まっていない。したがって終わることもないのだと、妙にホッとした気持ちになっていた。「まあ、何とかなるかな」そうつぶやいて俺はベッドに横たわり、電気を消した。
翌日は快晴だった。でも俺の気分は最悪。ゆうべはホッとした気持ちになったのに、目ざめた瞬間、やっぱり先輩に嫌われたくないと思ったのだ。嫌われるも何も、好かれているかも分からないと頭では分かっている。分かっているけれど、先輩をがっかりさせたくなかった。俺を見込んで本を貸してくれたのに、感想もろくに言えないような男だと思われたくない。でも里中にはアドバイスをもらえなかったし、ほかに頼れる人もいない。俺は深くため息をついて、重い足取りでアパートを出た。処刑台に向かう死刑囚はこんな気分なのかと思うと、やたらドラマチックな気分が盛り上がる、というか盛り下がる。

（８）

前方から、ランニングウエア姿の男女が息を弾ませながら走ってきた。すれ違いざま目をやると、二人は楽しそうに笑っていた。女性が髪をかき上げたとき、指にキラリと光るものが見えた。男性を見ると、やはり指輪をしている。二人は時折笑みを交わしながら、遊歩道を走っていった。俺はため息をつき、里中と美晴ちゃんもああなると思ったのに、

などとしょうもないことを考えながら、最寄り駅へと向かった。研究室にはまだ誰もいなかった。安堵のため息をついたが、処刑が先延ばしになっただけで、実際安堵できる要素は何もない。どんよりと暗い気持ちのまま、机にカバンを置くと、その隣に勢いよく突っ伏した。「上野、久しぶり」聞き覚えのある声に振り向くと、恭子さんが立っていた。博士課程を終えたあと、去年の三月まで非常勤講師をしていた。辞めた理由は結婚するからだった。その恭子さんがどうして、と思っていると、恭子さんは笑って、就職活動、と言った。「やっぱり専業主婦は柄にあわないと思って。専任講師を募集するっていうから、推薦状書いてもらったの」「じゃあ、今日はそれを取りに？」そういうこと、と恭子さんは言って、にやにやしながら俺を見た。「さっきから何、世界の終わりみたいなため息ついて」見られていたと知り、急に恥ずかしくなったが、今さら取り繕っても仕方ない。正直に話すことにした。
「実は、四月からドクターに入った女の人がいるんですけど」「聞いたよ！ すっごい美人なんだって？」「ええ、まあ」「で、何？ その彼女にさっそくフラれた？」「いやまだ、ていうか、別にコクってないし、そんなつもりないし」「でも好きなんでしょ？」いきなりの直球に虚をつかれ、思わずうなずいた。そしてカバンから例の本を出し、恭子さんに見せた。「これ、私も読んだよ」「本当ですか？ どう、でしたか」恭子さんは腕組みをして、うーん、と考えるしぐさをしたあと、腕をほどき、いまいちかな、と言った。「違うな、いま三、いや、いま五？」まあ要するによく分からなかったのよ、と恭子さんは笑いながら言う。「で、その本がどうかしたの？」恭子さんの抱いた感想に安心して、俺はこの本を読むことになったいきさつと、先輩と交わした約束について話した。「今日、感想を伝えることになってるんですけど、俺もこの話が分からなかったから、なんて言うべきか悩んでいて.....」なるほどねえ、と恭子さんは言った。

（９）

「たしかに、女性が好きそうな話だな、とは思う」「どの辺が、ですかね」「主人公の男の子にとって、この彼女はオンリーワンなわけでしょ。そこまで一途に愛されている彼女がうらやましいし、自分も同じように一途に愛されたい、そういうことなんだと思う」「そういう女性の気持ちを理解してほしいから、男子に読んでほしい小説、って売り文句になるわけですか」「たぶんね」「はあ.....」「その彼女が何を言ってほしいかは私にも分からないけど、オンリーワンになることの重要性、はポイントかもね」「オンリーワン.....」昨日里中が言った言葉だ。美晴ちゃんがそう言ったのだろうか。だとしたら美晴ちゃんは、里中にとってのオンリーワンになりたかった、ということか。それが叶わなかったから、自分をオンリーワンにしてくれる人を選んだ.....そうなのだろうか。「まあ、頑張って」恭子さんはそう言って出ていこうとしたが、ふと足を止め、方法がな

いこともないかな、とためらいがちに言った。「でもちゃんと相手に向き合わないから、あまりおすすめはできないけど.....」
「どんな方法ですか」「相手にどう思ったかを話してもらって、自分もまったく同じ感想を持った、って伝えるの」「なるほど、相手にしゃべらせるわけですね」「どうしても恥をかきたくないなら、そんなやり方もあるよ、ってことで」「ありがとうございます！」俺は立ち上がり、深くお辞儀をした。地獄に仏とはこのことだ。一筋の光明がさした。恭子さんに心から感謝して顔を上げたとき、背後で先輩の声がした。「上野くん、お待たせ。ごめんね、遅くなっちゃって」振り向くと、先輩は走ってきたのか、頬を上気させている。バッグからハンカチを取り出して額に当てるしぐさは、今すぐ抱きしめたくなるほどかわいかった（もちろん抱きしめたりはしない。それは犯罪だ）。

（１０）

「あの本、読んでくれた？」「はい、読みました」「嬉しい、ありがとう！」俺のそばに椅子を持ってきて、先輩は腰をおろした。俺も椅子に座る。ほのかに汗と石鹸のまざった香りがして、大きく息を吸い込んだ。先輩は大きな目をさらに大きく見開いて、うふふ、と笑った。
なんてかわいいんだろう、今すぐ食べちゃいたいくらい――いやいや、食べたら犯罪だろう！ 気分を変えるべく咳払いをして、俺は本を手に取った。「お返しします。ありがとうございました」「どういたしまして。で、どうだった？」さっそく来たか。俺はもう一度咳払いをして、キーワードはオンリーワンですよね、と言った。「そうなのよ！ 嬉しい、やっぱり上野くんに読んでもらってよかった」
子どものようにはしゃぐ先輩を見て、なんだか申し訳ない気持ちになった。でも、今さら分からなかったとは言えない。罪悪感を覚えながらも、恭子さんに言われたやり方を試すことにした。「先輩がどう思ったか、聞かせてもらってもいいですか」「私？ 私はね――」先輩はにこにこしながら語りはじめた。聞きながら俺は、先輩がいかにこの本を愛しているか、いかにこの本のよさを伝えたいと思っているかを感じ、ますます居たたまれなくなった。恥をかきたくないばかりに、卑怯なやり方をした自分が情けない。恭子さんが、いいやり方ではないと言っていたのがよく分かる。たしかに俺は、先輩と向き合っていない。本当に嬉しそうに、この本について語っているのに.....。せめてものお詫びに、俺は先輩の言葉にしっかりと耳を傾けることにした。「あれ、ちょっと変だな、おかしいなって思っても、なぜそんなことを言うのか、彼女に問いただすことはしないでしょ。そこが素晴らしいの。彼は彼女のことが大好きだから、彼女がしてほしいって言ったことや、やりたいって言ったことは全部受け入れて、叶えてあげる。こんな風に、まるごと百パーセント受け入れてもらえるって、なんて幸せなんだろう、私もそんな恋愛がしたい、そう思ったのよね」

うん、うん、と俺はうなずく。

（１１）

「でも、彼みたいな人は現実にはいないんだって知って、とても悲しかった。今まで何人か男の人に読んでもらったんだけど、みんなどこがいいのか分からないって言うの。こんなに素敵なお話なのに！」どきっとした。どこがいいのか分からない。まさに俺の抱いた感想だった。同時に、それを言わなくてよかったとも思った。恭子さんに食事をおごらなくては。いやでも、旦那さんがいる人におごったりして、誤解されないだろうか。恭子さんに誤解されるのは悪くない。悪くないが、旦那さんに誤解されるのは.....ちょっ勘弁。痛い思いはしたくない。
「ねえ、聞いてるの？」
「えっ」
現実に引き戻された俺の眼前には、ふくれっつらの先輩がいた。その顔もまじでかわいいっす！
「もう、ちゃんと人の話聞いてよね」
ふくれっつらをしながらも、先輩はちょっと嬉しそうだ。やはりオンリーワンの言葉が効いたのかもしれない。はい、すみません、と俺が言うと、先輩はまた笑顔になった。「私、上野くんがオンリーワンっていう言葉を出してくれて、本当に嬉しかった。やっと私の求めていた人に会えたって思ったくらい」――ええ？ まじで？
「そうなの、オンリーワンなのよ。彼が彼女をまるごと受け入れたみたいに、上野くんだったらきっと私をまるごと受け入れてくれる、そう思ったんだけど.....」ここまで言うと、先輩は上目づかいに俺を見た。俺の知っているかわいい先輩とは違う、妖艶な表情にどきっとして、俺は先輩から目が離せなくなった。先輩は俺を見たまま、バッグに手を伸ばす。「それでね、上野くんにお願いがあるの」ごくり、とつばを飲み込んだ。先輩はバッグの中からＡ四サイズの封筒を取り出すと、両手で俺に差し出した。「すごく恥ずかしいんだけど、これ」先輩を見ているうちに俺まで恥ずかしくなってきて、ひったくるように封筒を奪うと、一瞬ためらってから中を見た。「原稿用紙.....？」
先輩はうなずいて、くるりと背中を向けた。見ていないうちに読めということか。小さくため息をつき、原稿用紙を取り出した。

（１２）

妙な勘違いをするところだった。先輩が俺を特別視するはずないのに。そう思っても、やはり複雑な気持ちだ。一番上の原稿用紙には、水たまりの彼女というタイトルが書かれ、その隣に、水たまりの彼女とは、と説明があった。水たまりの彼女とは、明るく見えても足元には水たまりが広がっている、そんな女性のことです。あなたは彼女の明るさに目を奪われて、水たまりに気がつかないかもしれない。でもいったん彼女に近づくと、水たまりに足をとられて動けなくなる。そして徐々に、でも確実に、あなたは水たまりに取り込まれる.....。思わず身震いをした。水たまりに、取り込まれる？ アリ地獄みたいなものか？ 足元の床がゆがんだような気がして下を見る。もちろんゆがんだり曲がったりなどしていない。俺はホッとして顔を上げた。すると先輩と目が合った。今まで見たことがないほど冷静、冷徹で、まるで氷のような表情だった。この表情、どこかで見たと思ったが、どうしても思い出せない。誰かと話していたとき、こんな表情だった気がするけど、さて、誰と話してるときだったか.....そう思っているうちに、先輩は俺にとびきりの笑顔を見せた。「私が書いたの。初めて書いた小説だから、あまり自信ないんだけど.....」はにかみながら話す先輩は、やはり超絶にかわいい。「上野くんならきっと、この小説のよさも分かってくれるはずって思ったの.....読んでくれる、よね？」先輩は不安そうに首をかしげた。その不安そうな表情も超かわいいっす！ 次の瞬間、大丈夫、俺に任せてください、と宣言していた。先輩は心からホッとしたように、よかった、ホントよかった、と繰り返す。「次の作品も構想中なの。出来上がったらまた持ってくるね」へ.....？「上野くんが読んでくれるって思ったら、どんなことでも書けそう。楽しみにしててね！」じゃあね、と先輩は手を振り、研究室を出ていった。

おわり

奥付

奥付

水たまりの彼女

https://puboo.jp/book/96207

著者：比良岡美紀著者プロフィール：https://puboo.jp/users/miki-hiraoka/profile

感想はこちらのコメントへ https://puboo.jp/book/96207
ブクログ本棚へ入れる http://booklog.jp/item/3/96207

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（https://puboo.jp/）運営会社：株式会社ブクログ

水たまりの彼女

版番号の予定

{{--
--}}

著　者　　書籍情報の編集ページから、著者情報を入力してください

制　作　　Puboo
発行所　　デザインエッグ株式会社